

旗上弁財天社

旗上弁財天社は、鶴岡八幡宮の境内の東側にある源氏池に浮かぶ小さな島に建てられています。祀られているのは、知識、美、および芸術の女神である弁財天です。弁財天は水ゆかりの女神なので、弁財天を祀る神社はしばしば池、湖、または海の近くに建てられます。弁財天は元々はヒンドゥー教の女神サラスヴァティーで、6世紀中頃に日本に仏教が伝来すると、その直後から日本でも崇拝され続けています。鶴岡八幡宮では、12世紀末に創建されてから、弁財天が祀られています。源頼朝（1147-1199）は1180年に敵対する平家と戦をする前に、弁財天に必勝を祈願したとのこと。そしてついに平家に勝利し、自身を日本の支配者として打ち立てました。そして政権を鎌倉に置き、鶴岡八幡宮をその信仰の中心地としたのです。

弁財天は伝統的に、神仏習合的な女神として信仰を集めてきました。1868年までは、仏教と日本古来の神道との間で明確な線引きがされていなかったからです。1868年には、政府が神仏分離を命じ、鶴岡八幡宮は神道だけの神社になりました。現在の社殿は1980年に遡るもので、鶴岡八幡宮の創建800周年を記念して、文政年間（1818-1830）に描かれた絵を基に再建されたものです。

現在旗上弁財天社では、源氏が戦で用いたものを原型にした白い旗が奉納され、掲げられています。赤漆が塗られた社殿では、階段の上に琵琶を演奏する弁財天の彫刻があります。社殿の裏には政子石があります。名前の由来となったのは頼朝の妻である北条政子（1156-1225）で、人々はここで夫婦円満と子授けを願って祈ります。